

2016年10月25日発行の日本産機新聞に当社代表の大藪の記事が取り上げられました。

日本産機新聞

2016年(平成28年)10月25日(火曜日)

(3) 第1458号

(第3種郵便物認可)



ものづくりの改善と革新

ツールドインターナショナル大藪誠社長

リーマン・ショック後の2010年、ツールドインターナショナルは設立された。この未曾有の経済危機を起業の好機と捉えた大藪誠社長は、「この苦境に耐えたという経験があれば、今後どんな波が来ても必ず乗り越えられるはず」という

決意で会社を設立した。同社は、台湾やオーストリアなど海外メーカーの切削工具を中心に扱う機械工具の輸入商社だ。「インブルーメン

ト・オア・インベーション(改善か革新か)を会社のスローガンとして掲げ、低価格だが高品質

海外工具や技術提案

技術センター、名古屋に拠点も視野

大藪誠氏・1972年生まれ、京都府八幡市出身。95年近畿大学卒業後、機械工具商社に入社。2000年貿易商社に入社、2010年ツールドインターナショナル設立、代表取締役就任。

品は、Nine9社(台湾)で2製品、チロツル社(オーストリア)で1製品を取り扱う。「何か革新的なものがなければ、振り向いてももらえない」。ユーザーの声を大いにするという大藪社長。そう言えるのは、海外に商材を提案している。また、日本市場のニーズに合った製品を幅広く揃えていることも特長だ。不等分割・不等リードに特化したFeeders社(台湾)のエンドミルは、サイズや加工用途別に約2000アイテムを揃え、そのうち約半分は、サービスの充実も図る。「顧客のニーズにきめ細かく対応できる体制も重要」と、今年9月には大阪営業所(大阪市西区)を開設した。将来的には名古屋にも営業拠点を構えるほか、技術センターの開設や、特約店制度の導入なども視野に入れている。

様々な外部要因によって、先行きの不透明感が増す機械工具業界。そのなかで大藪社長は、経営理念でもある「可能性から未来を切り拓く」という言葉を大切にしている。「現状維持では何も生まれない。常に考え、先手を打っていけば、今後成長し続けられる」。